

東北土を考える会 夏期研修会

「俺達のスマート農業」



研修会を企画した盛川農場・代表の盛川周祐氏

▶ 7月26日
(岩手県花巻市)



麦稈処理は前後にシュレッダーを装着しての実演。
JD6155 + (フロント) クーンBPR300 + (リア) イマンツ 280



碎土整地は120馬力のトラクターで3m幅の実演。
JD6430PM + (フロント) ダルボ フロントバック
+ (リア) レムケン ヘリオドール9



播種機は西部開発農産が所有する6m幅12畦の仕様。
MF7615 + ガスバルドの真空播種機



青空のもと豪華な実演機をバックに集合写真を撮影

去る7月26日に岩手県花巻市で東北土を考える会(会長・永浦清太郎)の夏期研修会が開催された。テーマは「俺達のスマート農業」。GPSガイダンスや自動操舵など、新しい技術をメーカーが紹介しているものの、経営者は何を選んだらいいのか。農業経営者の目線で検討しようというのが企画意図だ。

当日は東北各県の農業経営者、農機メーカーの関係者ら約50人が炎天下の実演会場に参集した。盛川農場の小麦収穫直後の圃場で、GPSの自動操舵、麦稈処理からプラウ反転耕、表層混和、整地、播種、鎮圧の各作業の実演が行なわれた。機材は、盛川農場のほか、西部開発農産、各農機メーカーが持ち寄った。トラクターは75〜150馬力、前後の複合作業の提案もいまや当たり前だ。参

加者らはプラウ耕の意義を理解したうえで、あえてプラウを用いない土耕機のあり方も模索していた。

会場を移して検討会の最初の演目は、東北農業研究センターの冠秀明氏による「米国アーカンソーにおける土地利用型農業」に関する報告だった。9月14日に同研究センターでセミナーが開催されるので、興味ある方は参加いただきたい。次の演目は西部開発農産の清水一孝氏による「GPS・GISを活用した農場経



東北農研センターの冠秀明氏



西部開発農産の清水一孝氏



水分農産の西田真之介氏

営と費用対効果」で、導入に至る経緯から活用に至る過程、導入効果までがわかりやすく語られた。また北海道で開催された国際農業機械展に参加した水分農産・組合長の西田真之介氏がその報告を行なった。その後、盛川農場・代表の盛川周祐氏の進行で、実演された機械に関するディスカッションが繰り広げられ、交流会へ。実に濃密な研修会となった。

(加藤祐子)